



「墨、旅、出会い」

とよ だ いく こ
豊田 育子

1934年(昭和9年)
足立区千住生まれ
西瑞江在住



文字に魅せられて

小学生の頃、父のそばで墨を磨るのは私の役目でした。父の書く不思議な文字。墨をつけた筆の穂先から、絵のような不思議な形をした文字が、まるで生きているかのように描かれていくのです。「やあ、いいなあ、いいなあ」。私はその絵のような梵字をずっと眺めていました。「文字っておもしろいなあ」と思いました。

書の道に進むきっかけは、中学校の国語教師になってからです。生徒の中に信じられないくらい書のうまい子が何人かいたんですよ。これじゃ、私、教えられない、プロになれない。それで、日展の審査員をしていらした佐藤祐豪先生の門人となったのです。先生がお手本としてくださるのは中国の古典なんですね。王羲之とか顔真卿の書とか、これを習いなさいと。臨書ですね。

女学校1年生、13歳の時、担任の高橋先生が黒板に書いた楷書に、とても驚いたんです。その文字の美しさに。「あんな字が書けたらいいなあ」と思いながら、見とれていました。高校では、漢文の先生の授業を受けて「あんなふうに、中国語で漢詩を朗詠できたらいいなあ」と思いました。

書道をやっていると、どんどんその世界が広がっていくんですね。そうすると、この文字はどこからきたのかなあとか、そこにぶつかるでしょ。漢字のルーツは中国だと思うと、中国への思いが募りますよね。

日中国交樹立(1972年)以後、日本と中国の文化交流が盛んになっていきました。私も日中文化交流協会の書道展に出展。また、書道研修などで中国へは15回くらい行きました。でも、旅行では博物館の見学など、ゆっくり見られないんですね。それで、いつか中国に住んでみたいと思うようになったのです。上海美術館でも北京の美術館でも、書の宝庫は中国ですからね。

虚弱児施設へ

私が生まれたのは足立区千住。父母ともに教師。私は6人兄弟姉妹の三女。長姉と長兄は生まれてすぐに亡くなり、次姉と次兄が無事に育ち、私が生まれ、妹が生ま

れました。私は虚弱体質で体重が20kgもなかったんです。それで9歳の時に都立久留米養護学園(虚弱児施設)に入れられて、寄宿舎生活を送ることになりました。栄養指導をして虚弱体質を治していく施設なんですが、戦時中なので食糧事情がよくなかったんですね。養護学園の同級生というのは、半分以上死んじやっているんですよ。私は運よくというか、体質が改善して残ったんじゃないかなあ。

学園では、肺呼吸をよくするために詩吟や漢詩の朗詠もあるのです。「鞭声雨々夜河をわたるう〜」などやるのです、小学3年生で。あのメロディー覚えちゃうのよ。啄木の短歌とかも朗詠できるようになって。また漢詩がすごく好きになって、意味は分からないけれど、韻んじていると気持ちがいいんですよ。

昭和19年、父の生家である茨城県行方郡北浦に疎開。昭和21年に江戸川区立瑞江小学校を卒業。この頃には、父は僧侶になっていました。江戸川4丁目にある真福寺の住職であった母の弟が病気で亡くなり、父が跡を継いだのです。

大学生になってから身長が7cmも伸びたんです。体が丈夫になると、自信がつくんですね。友だちが「あの頃いじめてゴメンね」って、押せばすぐ転ぶから。でも、いじめられた記憶はあまりないんですよ。

私が大学に行く時に、母は「短大なら何とか頑張って月謝を払える」と言ってくれました。兄はすでに大学生でしたし。昭和27年に東京女子大短期大学の国語科に入学。貧乏寺では暮らしが立たないので、母は託児所を作ろうと思ったのです。でも、始めようと思ったら、できないんですよ、保育士の資格がないと。母は私に「あなた、夜は暇でしょ」。私は白梅保母学園の保育科に入り、その寮から昼は女子大に、夜は白梅学園に。女子大では、藤森朋夫教授の酔うように朗詠される万葉講座を受けました。短歌は万葉の時代からあるので、そのリズムというのはよほど日本人に合っているのでしょうか。卒業後、両親のつくったみづえ保育園で半年程保母をしましたが、やはり教師になりたいくて、公立中学校の教師になったのです。23歳の時に結婚。中野区に3年住みました。母に誘われ、25歳の頃から同人誌や短歌雑誌に投稿していました。

また、父の勧めで昭和35年に現在の地に新居を建てました。江戸川区立瑞江中学校勤務を経て、東京都大島町立中学校、いわゆる波浮の港の伊豆大島に11年いました。そして、20年間の教師生活を終わりにして、42歳の時に自宅と真福寺で書道塾を開いたのです。子どもは大島で2人が生まれ、4人になっていました。

「地の星に生まれて四人の子を産みて 今日もつぎの望月ひとり仰ぐも」

日本語教師として中国へ

1991年(平成3年)、日中技能者交流センターの「日本語教師募集」という小さな記事を見つけたんです。「これだ!」と思いました。教師の資格をもっていれば大丈夫かと思ったら、それだけではダメなのです。「日本の文化を伝える」という役目があるのです。それで、私は「書道できます、華道できます、茶道できます」など、できることをいっぱい書きました。そうしないと合格できないと思ったのです。当時、私の書道塾には塾生が60~70人いましたが、それをやめてでも中国へ行きたいという思いが強かったのです。

1992年8月、57歳の時に中国吉林省長春市の東北師範大学へ日本語教師として赴任しました。中国の新学期は9月ですから。中国へ1人で行くのは危ないと思ったので、夫にも一緒に行ってもらいました。「中国へ行ったら暮だけやっていたいいから」と説得して。夫も教員だったので、やがて現地へ日本語教師になりました。



◆東北師範大学にて、かな文字を教えた日

東北師範大学で少数民族のウイグル族の学生たちと出会いました。中国の人口の9割以上は漢民族で、56ある少数民族は1割にも満たないのです。学生といっても、医者になりたい人とか大学教授など、日本語を学んで日本の文化を学び、日本に行きたいという人たちが大学に集まってくるわけです。彼らや彼女らはエリートであるし、優秀なのです。ふだんはウイグル語を使っているのですが、中国語を学んで大学へ入るのです。中国語を使わないと、役人にも医者にもなれないんですね。

翌年、学生たちの招待で、トルファン、ウルムチ、カシュガル、ホータンなどシルクロード沿いの西域の街を訪れました。学

生たちの家は紡績工場をやっているなど、経済的に恵まれた人が多かったのです。私は東北師範大学に1年勤め、一時帰国後、先に夫が赴任していた中山大學に転任しました。

中国ではいろいろな人に出会いました。残留孤児、満洲にあった日本人学校に通っていた中国人、『大地の子』の著者山崎豊子さんに資料提供した人たち。また、中国の書家も紹介されました。あちらでは、お互いに書を交換するのです。漢詩などを書くのと、とても喜んでくれます。

私はどこに行くにも筆と墨をもっていきます。ひらがなの「あ」は、漢字の「安」を崩したもので、「い」は「以」からと筆で教えます。「いろは」を全部覚えれば、日本の言葉を書くことができるのです。また、自分の言葉足らずのところを漢字で書けば通じるし。筆と墨で書くと、皆さん感動してくれるんですよ。毛筆は役に立ちます。私は、筆1本あれば楽しいんだなあ。書の勉強をしようと中国へ行ったのに、学生や中国人との交流、また中国文化のほうが面白くなってしまいました。

放浪びと、根城に帰る

1997年(平成9年)に帰国し、写真短歌集『吐魯番の空』^{トルファン そら}を刊行。写真展もしました。

「城壁は 煉瓦の色に残るのみ 崩るる穴より吐魯番の空」
詩歌だけでは、城壁の崩れた状態を伝えきれないんです。それで写真を添えて写真短歌にしたのです。

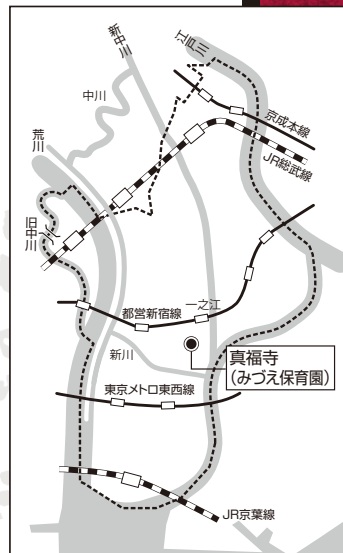
2014年(平成26年)、80歳の時に歌集『遊牧民の如く』^{ノマド}を刊行。

「山裾に モンゴル行きの列車見ゆ 羊群れるる草原の中」
草原を歩くと、羊飼いたちによく出会うんです。彼ら、遊牧民は、牧草を求めて何処までも行きますけど、大地の中で生きているという喜びをいろいろな所で刻んでいたんですね。彼らは目指すものがあって生活しているし、自由に回遊しているかに見えて、最後は自分の根城に戻ってくるんです。

「蒙古に 出土の骨をみつるて わが血の流れ遊牧民と思ふ」^{モンゴル ノマド}

私も放浪癖があるというか、ここにいると、ここしかないじゃないですか。でも、別の場所に行くと、「ああ、こんな世界もあったのか」と思うんですよ。短歌やっていると言葉も拾えるし、「旅っていいなあ」と思います。私も目的をもって移動し、それを詩歌に刻んできました。ふるさとに帰ると、川が流れているのはいいですね。やはり江戸川はふるさとであり、戻ってくる場所、根城ですね。

「江戸川の まうへに虹の橋懸る
水門跨ぎて二重の虹が」^{また にじゅう}



◆表写真の書は佐藤祐豪氏の書
◆インタビュー／2018年5月
◆聞き手／小宮和枝 村田正子
◆コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)